

本木昌造の足跡

暦年 西暦 年齢
文政 7年(1824年) 1歳

天保 5年(1834年) 11歳
弘化 元年(1844年) 21歳

嘉永 元年(1848年) 25歳

嘉永 4年(1851年) 28歳
嘉永 6年(1853年) 30歳

安政 元年(1854年) 31歳
安政 2年(1855年) 32歳

安政 3年(1856年) 33歳

安政 4年(1857年) 34歳

安政 5年(1858年) 35歳

安政 6年(1859年) 36歳
万延 元年(1860年) 37歳

文久 元年(1861年) 38歳

文久 3年(1863年) 40歳
元治 元年(1864年) 41歳

慶応 4年(1868年) 45歳
明治 元年

明治 2年(1869年) 46歳

明治 3年(1870年) 47歳

明治 4年(1871年) 48歳
明治 5年(1872年) 49歳
明治 8年(1875年) 52歳
明治 45年(1912年)

主な事項

6月9日馬田又次右衛門の子として生まれる。
(新大工町乙名北島三弥太の四男説もある)
オランダ通詞本木昌左衛門の養子に。オランダ通詞となる。
オランダ使節コープス来崎の際、通訳を行い、褒美として白銀5枚、手当銀百目等を賜る。
蘭書植字版、印刷機を、通詞仲間北村元助・品川藤兵衛・楢林量一郎とはかって、オランダより買入れる。
(わが国鉛活字輸入の最初)
流し込み活字を案出する。辞書「蘭和通辯」を刊行。
小通詞過人となる。
ロシア使節プチャーチン来崎、通訳。
ペリー2度目の来日に伴い下田でロシア使節の通訳。
海軍伝習所の伝習掛に。
甲比丹ドンケル・キュルシウス、医師ファン・デン・ブルグについて、分離、測量、算術、石炭及び鉄製造等を学ぶ。
活字判摺立方摺立掛を命じられる。
造船・海運について由緒書を提出する。
幕府より銀5枚を賜る。
文法書シンタクシスを刊行する。(528部印刷)
英和对訳商用便覧を出す。
活版師インデルマウル、新製植字の仕方を伝授する。
昌造の長男、昌太郎没。(6歳)
昌造の妻、縫没(23歳)
出島蘭館において「物理の本」を出す。
和英商売対話集初編(塩田幸八発行)を刊行する。
長崎製鉄所御用掛となる。
蕃語小引(増永文治・内田作五郎発行)を刊行する。
長崎製鉄所でヴィクトリア、チャールス号の2蒸気船を買い入れ、本木昌造船長として操縦する。
4月チャールス号で大阪、紀州へ、7月ヴィクトリア号で小倉へ。
11月ヴィクトリア号で下田を出港後八丈島に漂流。
(江戸経由で翌年9月長崎に帰る)
崎陽雑報を発行する。(日本初の地方紙 木活字と金属活字の混合)
「秘事新書」を出版する。
7月長崎製鉄所頭取役を命ぜられる。
浜町・築町間に日本最初の鉄橋(くろがね橋)を架ける。
新街私塾を開く。(現長崎県市町村職員共済会館)
製鉄局機関伝習方教頭になる。
上海よりウイリアム・ガンブルを招く。
活版伝習所を唐通事会所跡に設立。(現長崎市立図書館)
ウイリアム・ガンブルより電胎鑄造母型による活字製造法を習得。
新街活版所を新街私塾内に創業。(日本初の民間活版事業)
明朝鑄造活字を使用して「保建大記」を刊行。(新街活版所)
大阪の鉄橋(高麗橋)を架ける。
(3月)長崎新塾出張大阪活版所を開設(酒井三造・小幡正蔵を遣わす)
(10月)横浜に活版所を開設(陽其二・上原鶴寿を派遣)
12月わが国最初の日刊新聞「横浜毎日新聞」を発行
(12月)京都で「點林堂印刷所」を開設(古川種次郎他)
10月東京に小幡活版所開業。
平野富二が東京に長崎新塾出張活版製造所を開設。
9月3日長崎において没す。大光寺に葬られる。
従五位を追贈される。



京都 (點林堂印刷所跡)

明治3年(1870年)
12月 京都で「點林堂印刷所」を開設(古川種次郎他を遣わす)



「京都印刷発祥の地」の石碑
京都市地下鉄烏丸御池駅構内



京都市中京区三条柳馬場東

東京

明治4年(1871年)
小幡活版所開業
明治5年(1872年)
長崎新塾出張活版製造所(9人で上京)
明治6年(1873年)
築地に移転(平野活版所)
明治18年(1885年)
東京築地活版製造所



長崎新塾出張活版製造所跡

横浜

明治3年(1870年)
10月 活版所開設
(陽其二・上原鶴寿を遣わす)
12月 我が国最初の日刊新聞
「横浜毎日新聞」

八丈島

元治元年(1864年)41歳
ヴィクトリア号で八丈島に漂流
翌年江戸を経て9月に長崎へ帰る



ヴィクトリア号の鐘

大阪

明治3年(1870年)
3月 長崎新塾出張大阪活版所開設
(酒井三造・小幡正蔵を遣わす)



大阪活版所跡の碑



四天王寺の本木昌造記念碑

伊豆(下田・戸田)

安政元年(1854年)31歳
アメリカ使節ペリーの2度目の来日により、下田へ派遣される。下田においてロシア使節の通訳も行う。
地震によるロシア艦ディアナ号沈没のため、伊豆国戸田で軍艦打建の検分方を勤める。
(プチャーチン、帰国後本木昌造に銀時計を贈る。)

